平成21年度　特別研修　研究報告書

個別支援と集団育成の統合に着目した学級経営の在り方にかかわる研究
～「Ｃ＆Ｓ質問紙」を活用した支援の工夫～

生徒指導相談係
清水　浩美（小学校教諭）
周藤　健司（小学校教諭）
森田　　修（中学校教諭）

Ⅰ　テーマ設定の理由

教師は、学校生活で児童生徒一人一人と向き合い集団のよさを生かしながら、児童生徒の成長を支援している。しかし、現状では、学級が互いを高め合う集団として機能することが難しい状況がある。地域との関係の希薄化による家族の孤立化や多様な価値感によるライフスタイルの変化、大人の社会的規範意識の欠如などの現代社会が抱える課題が背景にあり、児童生徒は、発達段階における社会性やコミュニケーション能力を十分に身に付けられずに成長している。学校生活の中では、自分の気持ちをうまく伝えられず集団に馴染めなかったり、乱暴な言動を繰り返したりする様子が伺える。教師は、個性的な児童生徒一人一人への個別支援と学級を集団として機能させる集団育成の狭間で苦悩している。

そこで、個別支援と集団育成の統合にポイントを置いた具体的な手だてを追求することは、児童生徒が互いを高め合う相互成長を支援することであり、教師にとって今後の学級経営の在り方の一助となると考え、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究のねらいと課題解決策

１　ねらい

本研究は、個及び学級の実態に即して、個別支援と集団育成の統合に着目した学級経営の在り方を実践を通して明らかにする。

２　対象

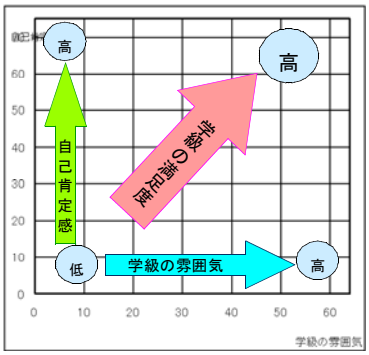
小学校２年、４年、中学校１年

３　手だて

(1) Ｃ＆Ｓ質問紙の検査結果と併せて、参与観察や面接で得られた情報による総合的理解による実態把握

> Ｃ＆Ｓ質問紙の説明
>
> いじめや不登校を予防するために、個及び学級の実態を「学級の雰囲気」と「自己肯定感」から把握し、集計結果は、散布図として一人一人が点（プロット）で表示される。プロットの位置から個の実態を、プロットの分布から学級の実態を把握することができる心理テスト である。

表１　散布図の見とり方



(2) 実態に即した個別支援と集団育成の工夫

個別支援とソーシャルスキルトレーニング、構成的グループ・エンカウンターなどのグループアプローチを実態に即して取り入れ、個が集団を育て、集団が個を育てる集団体験活動を通して、居心地のよい学級作りのための工夫を行う。

４　検証方法

- Ｃ＆Ｓ質問紙の検査結果（事前・事後の比較）
- 参与観察や振り返りカードによる児童生徒の変容

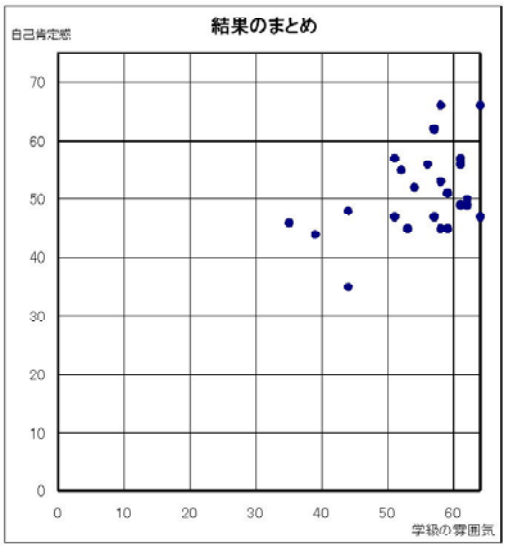
Ⅲ－実践１

１　実態

本学級は、第２学年の児童で、明るく素直な児童が多く、いろいろなことに前向きに取り組むことができる。また、みんなで一緒に遊んだり、活動したりして楽しく学校生活を送り、学級としてのまとまりを感じる。しかし、集団生活のルールやマナーなどの社会性を十分に身につけていない時期であり、まだ学校生活で自分の考えを生かす場面や自分自身が周りの友達とどんなかかわりを持っているのかということに気付いていない。さらに、自分がどんな力を持っているのか、また、みんなで力を合わせるとどんなことができるのかなど、学級の中で自分を生かすことができない状態である。そのために、友達とトラブルを起こしてしまったり、友達との人間関係がうまくいかずに、友達に強い口調で話し、怒らせたり泣かせたりする児童もいる。

図１は、６月に行った自己肯定感と学級の雰囲気の認知に着目した質問紙（以下、Ｃ＆Ｓ質問紙と記す）の結果である。学級集団としてまとまってはいるものの数名の児童が集団から離れていることが分かった。その中には、自分に対しての自己肯定感が低い児童や学級の雰囲気をよい雰囲気だと感じていない児童が数名いる。その中でも、自己肯定感が低い児童（気になる児童）は、授業中に必要以上に大きな声を出したり、周りの子とのトラブルを起こしてしまったりすることがある。自分の過ちを素直に受け入られずに、周りの子との関係を自分から改善することができないことが多いので、社会性を身に付けることが必要であると考える。

表２　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果(6月)



２　実践研究の考え方

(1) ねらい

本研究は、Ｃ＆Ｓ質問紙の結果や参与観察から、個と集団をつなぐための学級全体を対象とした系統的なソーシャルスキルトレーニング（以下、ＳＳＴと記す）を行い、気になる児童と学級全体がかかわり合い、互いのよいところを認め合いながら、集団として高め合っていくことができる学級づくりをねらいとする。

(2) 指導方針

○　２年生という発達段階は、よりよい社会性を身に付けていくことができる大切な時期であるため、系統的なＳＳＴの取組により、よりよい友達とのかかわり方を集団の中で意識的に考えさせ、体験することを通して人間関係を形成していく。

○　本学級の児童集団の実態に合った系統的なＳＳＴの取組を行うために、Ｃ＆Ｓ質問紙を実施する。その結果を踏まえ、「個」と「集団」の実態を客観的に把握し、実態に合った系統的なＳＳＴの実践を工夫していく。

○　集団から離れている児童に対して、よりよい対人関係ができるようなＳＳＴを取り入れ、集団の中で、自分を受け入れてもらうためどのように行動したらよいかを身に付けるための個別支援を工夫していく。

○　気になる児童は、自己肯定感が低く、集団の中で自分の気持ちをうまく伝えることができずにトラブルになってしまうことが多い。そこで児童が抱えている問題を機会をとらえて積極的によいところを認めたり、アドバイスをしたりするチャンス相談を行う。

また、低学年ということで家庭環境の影響も大きいと考えるので、その児童の実態を参与観察などで把握しながら集団の中で適切な個別支援を行っていく。

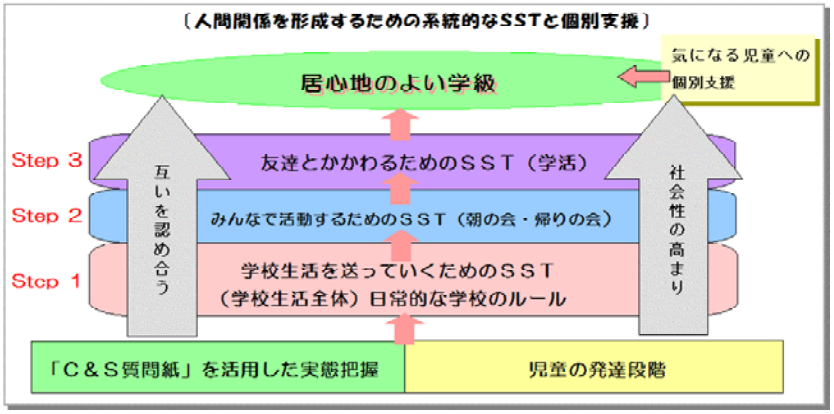


図１　人間関係を形成するための系統的なSSTと個別支援

３　研究計画及び検証計画

(1) 研究計画

総合的理解による個及び集団の実態から系統的なＳＳＴを選択し、実践する。

月	場面	ソーシャルトレーニング		ねらいや内容	個を育てる・集団とつなぐ支援
４月	学校生活	学校生活を送っていくためのＳＳＴ		日常的な生活ルールを守り、落ち着いて生活することができる。	励ましなどの意欲付けを行う。
５月	朝の会 帰りの会	みんなで活動するためのＳＳＴ		係活動や学習、話し合いなど、みんなで活動する時のルールを守り、自分の役割を果たすことができる。	役割を果たすための援助と声かけを行う。
６月	学活	友達とかかわるためのＳＳＴ	にこにことば	友達がいい気持ちになれる言葉はどんな言葉か考えることができる。	話し合いの進行役を務めさせ、声かけを行い、集団の中で、役割を果たさせる。
９月	帰りの会		めざせ！ マナー名人	必要な場面で必要な言葉をすぐに言うことができるように、カードを使って日常的に友達にかける言葉を練習する。	励ましなどの意欲付けを行いながら、友達とかかわるための言葉の習慣化を図る。
10月	学活		ほめほめ大作戦	仲間同士でよいところを見つけ合い、お互いにほめ合い、友情関係を広げたり、深めたりすることができる。	言葉を決める時に、なかよしの友達にかけている言葉を取り上げ、友達を認め、かかわる経験を持たせる。
11月	学活		ありがとうカード	今までかけてもらった言葉に対して、ありがとうという気持ちをカードに書いて伝えることができる。	ロールプレイを行わせ、みんなの前で、認められる場面をつくる。

(2) 検証計画

研究仮説	検証の観点	検証方法
学級作りにおいて、Ｃ＆Ｓ質問紙を活用して把握した児童・学級の実態に応じた系統的なＳＳＴや個別支援を工夫することによって、互いに認め合う居心地のよい学級になるだろう。	○学校生活の中や学級活動において、系統的なＳＳＴを積み重ねていくことによって社会性を高め、互いを認め合う気持ちを育てるために有効であったか。 ○活動の中で気になる児童の気持ちに寄り添い、個を育て、集団とつなぐ個別支援が適切であったか。	・Ｃ＆Ｓ質問紙の実施（11月） ・学校生活の観察 ・振り返りカード

4　研究の展開

(1) ＳＳＴ「にこにことばば」・・・・決まった場面について考える

日常生活で、友達同士ささいなことで、言い争いになってしまうことがあった。気になる児童は、友達のやったことを許せず、強い口調で友達を責めていた。

そこで、学活の中で、友達とかかわるためのＳＳＴとして、「ぶつかった時にかける言葉」について考えた。『にこにことばば』として、「ごめんね。」という場合と『にこにことばば』でない「痛いな。」と言う場合を児童にロールプレイさせた。また、他にも考えられる場面でどんな言葉をかけたらいいのか話し合わせ、お互いにいい気持ちになる言葉「にこにことばば」をかけ合っていこうと話した。

その後、下校の時に、仲間はずれになってしまっていた子が「友達に帰ろうといったら、一緒に帰ってくれて嬉しかったよ。」と言ってきた。また、学級中でも友達同士でぶつかったりした時に、すぐに相手に謝ろうとする様子が見られ、トラブルも少なくなってきた。

> 気になる児童の様子（活動の様子）
>
> 「にこにこ言葉」を考える話し合いで、進行役を務めた。友達の意見を聞きながら、友達がいい気持ちになる言葉を考えることができた。それを、発表の場面で、みんなに伝え、その頑張りを認めてもらいうれしそうだった。

(2) ＳＳＴ「めざせ！マナー名人」・・・・言葉の習慣化

帰りの会で「ありがとう」や「ごめんなさい」などの言葉を自然と友達にかけられるように、カードで練習を行った。子どもたちは、リズムよくその場面にあった言葉を楽しそうに練習し、自分がマナーの達人になったことを喜んでいた。

気になる児童が、友達とぶつかってしまい、相手のことを責めていたことがあった。その時、チャンス相談を行い、以前、友達の気持ちを考えて「ごめんね。」と言えた時を思い出させた。そして、その時の行動をほめ、「優しい気持ちを持っているから、友達の気持ちを考えよう」と声をかけると、友達のことを許すことができた。

> 気になる児童の感想（振り返りカードから）
>
> 「マナーの達人をして、すぐにごめんねが言えるようになった。」

(3) ＳＳＴ「ほめほめ大さくせん」・・・・自分からかかわろう

学校生活で友達のよいところをたくさん見つけてほめてあげようという活動を行った。どんな言葉があるか子どもたちは意欲的に考え、「ほめほめの木」を実らせていこうというめあてを持った。そして、それを実践する場面では、子どもたちは意識して友達のよいところを見つけて言葉をかけ合い、自分が友達にかけた言葉を帰りの会で振り返り、「ほめほめの木」にシールを貼って実らせた。よいところを認め合っている子どもたちの姿を見ると、ほほえましい雰囲気が伝わってきて、いつもおとなしい子が、「字がうまいねって言われてうれしかったよ。」と言いに来てくれたときの表情がとても印象的だった。

図２　活動の様子

> 気になる児童の感想（活動の様子）
>
> 帰りの会で一日の自分の行動を振り返り、友達にかけた言葉を聞いたところ、意欲的に自分のかけた言葉を発表してくれた。また、ほめほめの木にシールを貼ることにも興味を持ち、放課後進んで手伝いをしていた。

(4) ＳＳＴ「ありがとうカード」・・・・気持ちをかえそう

「ほめほめ大さくせん」の活動を発展させて、学活の時間に友達からかけてもらった言葉

によって、自分の気持ちがどんな気持ちになったかを思い出させた。そして、友達とかかわり、ほめられたことで、「うれしかった。」「ほかほか温かい気持ちになった。」などの自分の気持ちもよい気持ちになることに気付くことができた。さらに、その気持ちを友達に返すために、『ありがとうカード』を書き、友達に渡した。互いにカードを渡し合うときの子どもたちの表情は、とてもにこやかで、「先生、もっと書きたい。」という子もいた。さらにこの活動を通して、互いに認め合い、よいかかわり合いを定着させることができるように継続して行っていく。

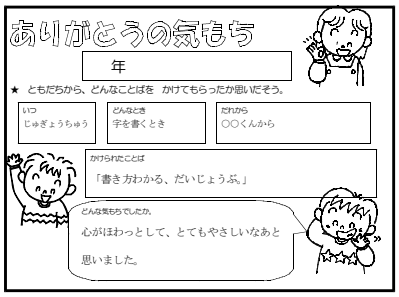


図３　ありがとうカード

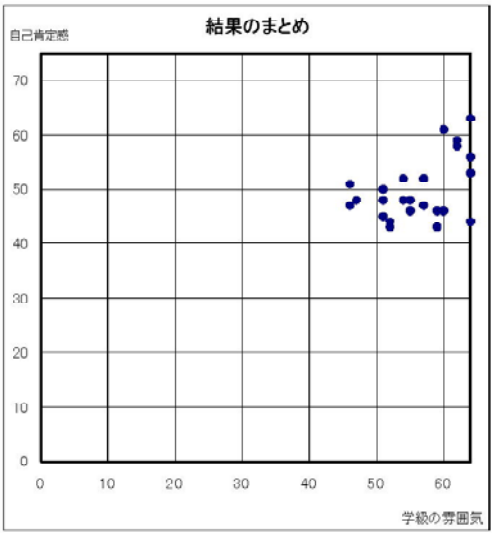
５　研究の結果と考察

(1) 研究の結果

①　系統的なＳＳＴは、社会性を高め、互いを認め合う気持ちを育てるために有効であったか。

表２から、学級全体の「学級の雰囲気」を読み取る数値が右に集まり、平均値も54から56.1に増加していた。また、６月にプロットが右上の集団から離れていた児童も、右上の集団に入り、一つの集団としてのまとまりが見られる。また、参与観察から、互いを認め合う場面がいろいろなところで見られ、友達の頑張りを素直に認める声かけや困っている友達に温かい言葉をかけようとする様子が見られ、日常生活で、友達が喜ぶ言葉を使おうとする雰囲気が感じられるようになった。

表３　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果(11月)



②　気になる児童の気持ちに寄り添い、個を育て、集団とつなぐ個別支援は、適切であったか。

自己肯定感が低く、集団の中でトラブルを起こしてしまう児童に対して、機会がある毎にチャンス相談を行ってその児童の気持ちに寄り添ったり、その児童と集団を結びつけるようなＳＳＴを意図的に取り入れたりして支援を行ってきたところ、表２のように、自己肯定感も上がり、学級も居心地がよいと感じられるようになってきている。

(2) 考察

本研究は、小学校２年生の児童に、学級の実態に応じた集団と個を結びつける系統的なＳＳＴを実施するともに、一斉指導の中での気になる児童への個別指導を行ってきた。その結果、学級の中で、十分な社会性が身に付いていない児童は、いろいろな経験を積み重ねていきながら、友達同士でのかかわり方を学び、自分たちで居心地のよい学級をつくっていこうとする気持ちが高められたように感じる。その中で、気になる児童も集団の力によって引きつけられ、社会性を身に付け、心を成長させていくことができたと考える。また、低学年ということから、自分の力ではできないことも多いので、一斉指導の中で気になる児童に対しての必要な支援をあらかじめ、教師が準備しておき、何気なく支援することも必要であると感じる。

さらに、学級が居心地のよい互いを認め合える集団として、高め合っていくことができるように、一人一人に寄り添いながら、児童がよりよい人間関係を築くための実践研究を進めていきたい。また、配慮すべき児童に対しても、学級の中の児童と一緒に学び合い、成長していくことができるようにさらに支援や援助を工夫していきたい。

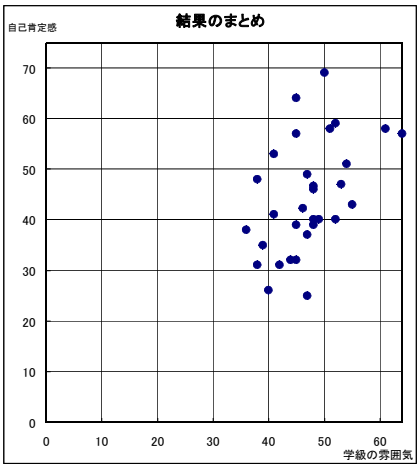
Ⅲ－実践２

１　実態

本学級は、第４学年で学年全体の雰囲気から見ると全体的におとなしい。その中で、運動に自信のある子・絵を描くことに自信のある子・計算の速い子・漢字をよく覚えてくる子など、それぞれ特徴を持った児童がいる。そういった児童は、クラスの中でも先頭に立つことができ、授業中や休み時間の活動、掃除、班での話し合いなどで中心的存在となることができる。しかし、一方で口数の少ない子・転入してきた子・自分をうまく表現できない子などは、自分から行動に移すというのではなく、誰かに誘われてやっと活動の仲間に入っていく姿が見られる。また、休み時間に外で鬼ごっこをしようと声をかけられても、外に出ず教室で読書をしたり絵を描いていたりして過ごす児童もいる。

表４は５月に「自己肯定感と学級の雰囲気の認知に着目した質問紙」（以下Ｃ＆Ｓ質問紙と記す）を行った結果である。

表４　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果(５月)



「学級の雰囲気」の数値は、３０～６０までと横幅が広く、「自己肯定感」の数値は２０～７０までの縦長のプロットを示している。

ギャングエイジといわれる年代であるので、２～４名ぐらいで仲良しグループを作りたがる姿が見られる。そのため、他の友達のよさを発見しようとせず、交友関係が固定化されつつある。みんなで遊んでいても、自分の気に入っている子と一緒に行動する姿が見られる。しかし心の中では、「新しく友達を作りたい」「友達に自分の存在を認めてらいたい」と思っているが、自分に自信が持てず行動に移せない児童もいる。そこで、グループ体験活動を通して、自分のよさや相手のよさに気付き、互いを理解していくなかでよりよい集団づくりをしていく必要があると考えられる。

２　実践研究の考え方

(1) ねらい

本学級の児童は、C&S 質問紙の結果から学級の雰囲気や自己肯定感において、個人差が大きく出ていることが分かった。このことから、新しいクラスの中で、以前から仲のよい友達とは一緒に行動するが、新しい仲間づくりに積極的にかかわれない児童が多いのではないかと考えられる。そこで、図４に示すように構成的グループ・エンカウンター（以下 SGE と記す）を活用する中で、小グループ間をつなぎ、凝集性の高い学級づくりをしていくことをねらいとする。

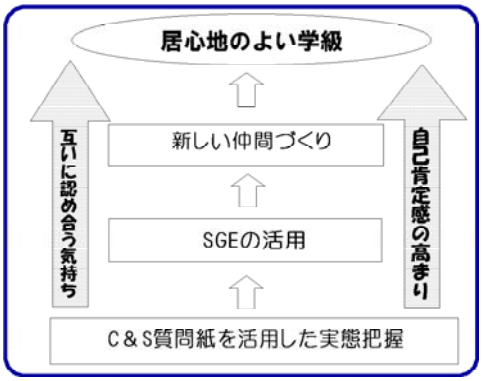


図４　居心地の良い学級づくり構成図

(2) 指導方針

○　集団性のあるものから取り組む。
（年度途中の取り組みになるため、学校行事などに対応できるようなものから取り組む。）

○　言語表現を苦手とする児童がいるため、ゲーム性があり動きのあるものを取り入れる。
（全員が接触できるようなものを取り入れる）

○　ゲーム性を持ちながらも、自分や友達のことについて考えることのできるエクササイズを取り入れていく。

○　互いの気持ちを伝え合い、認め合えるようなエクササイズを取り入れていく。
○　エクササイズの振り返りシートの内容から、チャンス相談や面談を行い、適切な個別支援を行っていく。

3　研究計画及び検証計画

(1) 研究計画

総合的理解による個及び集団の実態から下表に示すエクササイズを選択し実践する。

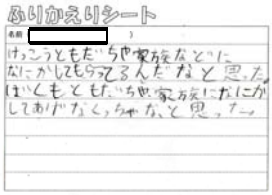
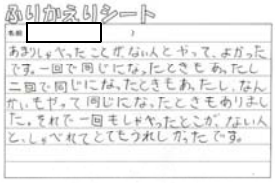
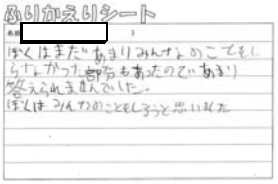
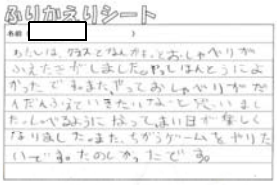
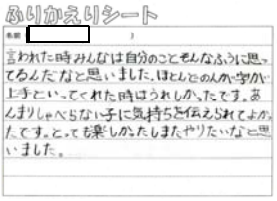
月	エクササイズ	ねらいと内容	計画理由	実施した教科	備考
9	聖徳太子ゲーム	・一つのグループが前に出て、一つの単語の音を、一人一人が一音ずつ分担し、一斉に言う。それを聞いて、他のグループが何の言葉かを当てる。	・運動会前ということでゲーム性の強い、グループ対抗のものに取り組む。	学級活動	運動会前
10	わたしのために あなたのために	・今週一週間について、人からお世話になったことを思い出す。 ・「お世話になったことの数」だけワークシートの記号に色をぬり、何をしてもらったかを書く。	・運動会で楽しい思い出を作った子どもたちが、いろいろな方々に支えられていることに気付かせるために取り組む。	道徳	運動会後
10	心と心の握手	・心の中で１か２か３のいずれかを数え、「せーの」と呼吸を合わせて、互いに自分の数えた数だけ握りしめる。	・三度目の SGE で少し慣れてきたところで、身体接触を取り入れたエクササイズを行う。	学級活動	
10	私はわたしよ	・自分が人と違っていることを、他人には言えない自分自身の個性や経験などを三つ考えさせて書く。時間になったら回収し、担任が一人一人読み上げていく。分かったところで、友達の名前を発表させる。	・前回のエクササイズで手を握る活動（接触）を行ったので、自分のことを振り返ったり、相手のことを分かろうとしたりする活動を行う。	学級活動	
11	つながり カップル	・友達と姓名に何か共通点やかかわりがあるか見付け合う。 ・見つからない場合は、趣味や好きな色などでつながりを見付け合う。	・自己紹介と、相手を理解するために行う。固定された友達だけではなくするために、全員とのつながりを見付けさせる。	学級活動	
11	あなたの○○が好きです	・二重の円を作って、中側の子が外側の子に対して、相手の好感の持てる点や長所などを相手に伝える。	・自分の気持ちを相手に知ってもらい、互いの気持ちがよくなるようにするために行う。	道徳	

(2) 検証計画

以下に、研究仮説並びに検証の観点、検証方法を示す。

研究仮説	検証の観点	検証方法
学級づくりにおいて、C & S 質問紙を活用して把握した学級・児童の実態に応じた SGE を活用することによって、互いに認め合う居心地のよい学級になるだろう。	SGE に取り組むことは、自己肯定感を高めたり、互いのよさを見付けたりすることに有効であったか。	・C & S 質問紙 の実施（11月） ・学校生活の観察 ・振り返りカード

4　研究の展開

月日	エクササイズ	児童の反応	振り返りシートから
9月 25日 運動会 前実施	・聖徳太子ゲーム	・最初は、出題するチーム全員が何を言うか聞き取ろうとしていたが、途中から一人が一人の言葉を集中して聞き、チームで協力することが答えを出すのに大切であることに気づくことができた。この体験の中で、協力する気持ちが少し芽生えてきた。	・最初はいっぺんに聞いていたからわからなかったけど、一人一人がしゃべっている人の口を見て当てていったら、答えが見つかりました。
10月 2日 運動会 後実施	・私のために あなたのために	・2学期が始まってから運動会を通して当日までお世話になったこと、何かしてもらったことを振り返り、自分の生活が色々な人に支えられて生かされていることに気づかせるために行った。最初は、「お世話になっていない」とか「何もしてあげていない」という声が聞こえてきたが、どんなささいなことでもよいと話し、例を出すと自分がたくさんの人に支えられていることに気づきワークシートに書くことができた。	 ふりかえりシート けっこうともだちや家族などに なにかしてもらってる人だなと思った はいともともだちや家族になにか してあげなくちゃなと思った。
10月 9日	・心と心の握手	・最初は、男子と男子、女子は女子というように、なかなか異性に握手をする姿が見られなかったが、「クラス全員の人と握手」と話したので、次第に異性間でも握手をするようになった。一回で心に決めた数が合うと、とてもうれしそうだった。男女共にあまり話したことのなかった子が話をすることができた。	 ふりかえりシート あまりしゃべったことがない人とやって、よかったです。一回で同じになったときもあったし二回で同じになったときもあったし、なんかいもが、て同じになったときもありました。それで一回もしゃべったことがない人と、しゃべれてとてもうれしかったです。
10月 13日	・私は私よ	・クラスの友達の得意なことや特別な体験などを聞いて誰のことなのか考えて発表し合った。3つのヒントから「○○ちゃんのことだ」と楽しそうに自分の考えを発表し合った。自分のことを読まれると恥ずかしそうにしている子もいたが、終わった後の感想では、みんな「またやりたい」というコメントが書かれていた。	 ふりかえりシート ぼくはまだあまりみんなのことをしらない。かったから、ぼくもあったのでありがとう。 答えられませんでした。 ぼくはみんなのことをしろうと思いました。
11月 4日	・つながり カップル	・前時までに、手をつなぐというスキンシップを行っていたので、今度は会話の中でコミュニケーションが図れるようにした。相手との共通点を探すために、自己紹介をしたり、色々質問したりする中で会話をし、コミュニケーションをとる姿が見られた。	 ふりかえりシート わたしは、クラスとなんかが、とおしゃべりがふえたきがしました。やっぱりほんとうによかったです。また、やっておしゃべりがだんだんふえていきたいなーと思いました。しゃべるみうに、はって、まい日が楽しくなりました。また、ちがうゲームをやりたいです。たのしかったです。
11月 18日	・あなたの○○ が好きです	・互いのよさを認め合い、自分のよさを相手から言ってもらうことで自尊心を高めるために行った。今回は、一時間友達のよさを見つける時間をとり、全員分を考えそれを伝えるようにした。相手に伝える時は緊張していたようだが、自分のよさを相手から言われると、とてもうれしそうにしていた。	 ふりかえりシート 言われた時みんなは自分のことをみんなふうに思ってるんだなと思いました。ほとんどのんかの字が上手といってくれた時はうれしかったです。あんまりしゃべらない子に気持ちを伝えられてよかったです。とても楽しかったしまたやりたいなと思いました。

５　研究の結果と考察

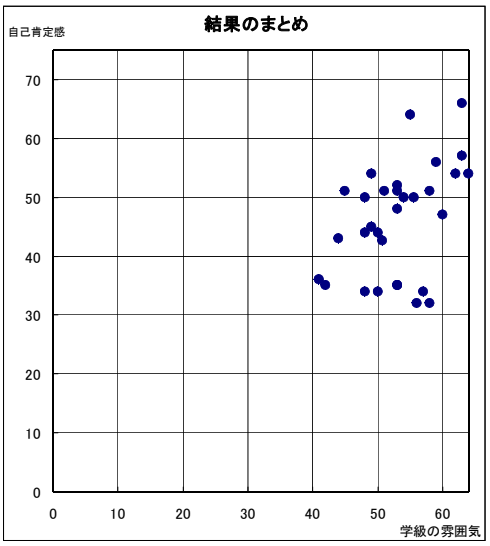
(1) 研究の結果

年度当初は、少人数のグループで行動する姿が見られたが、SGE の体験活動をするなかで、グループを越えた児童間の相互交流に広がりを感じられるようになった。６回のエクササイズの後、Ｃ＆Ｓ質問紙を行った結果、表５のような結果になった。５月に比べると、学級の雰囲気の平均数値は、47.1から53.1となり全体的に右寄りになった。また、自己肯定感も44.3から46.2と数値が上がった。

(2) 考察

５月の時点では、担任の参与観察による主観的理解は、児童が学級をよい雰囲気と感じていると理解していた。しかし、客観的理解として実施しＣ＆Ｓ質問紙（事前）の結果では、児童個々の集団としての上下左右に大きく広がっており、教師による主観的理解とＣ＆Ｓ質問紙による客観的理解にずれがあることが分かった。そのずれを解消するために参与観察をていねいに進めるなかで、総合的理解として見えてきた学級課題に即して具体的手だてを講じた。

表５　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果(11月)



SGE を活用した学級づくりに取り組んだことによって、Ｃ＆Ｓ質問紙による事前事後の比較では、学級の雰囲気や自己肯定感の数値ともによりよいものとなり、客観的データは向上した。児童の実態を数値で把握することにより、児童個々の個別支援の必要度が分かったので、チャンス相談や面談などを積極的に行うこともできた。また、SGE のエクササイズを通して、友達のよさを見付けることができたり、友達から認められたりする体験を通して、自他を尊重するかかわりが日常生活にも広がっている様子を振り返りカードからも読み取ることができた。さらに、以前は、親しい児童間でグループを作り学校生活を送ることが多く、グループを超えた交流が見られなかったが、担任による参与観察では、学級内における人間関係の広がりを感じ取ることができた。

本研究の実践は２学期を中心に取り組んだものである。担任の経験値や主観的理解に頼らず、客観的理解や参与観察を踏まえた総合的理解に基づいて、個並びに学級の課題を把握することの重要性を感じることができた。また、課題に対する具体的手だてとしてのグループアプローチ（本学級では SGE を実施）を計画的に展開することが有効であることが分かった。本研究で得られた成果は、今後の学級経営において大きな役割を果たすのではないかと考えられる。

課題として、総合的理解におけるＣ＆Ｓ質問紙の結果を有効に活用するために、個並びに学級の状態をより的確にみとることが挙げられる。また、グループアプローチやエクササイズの選定、行う順序・タイミングについて、さらなる研修が必要と考える。

＜主な参考文献＞

・　國分康孝　監修　『エンカウンターで学校が変わる』小学校編　　図書文化
・　國分康孝　監修　『エンカウンターで学校が変わる』part ２　小学校編　図書文化
・　國分康孝　監修　『エンカウンターで学校が変わる』ショートエクササイズ集 part ２　図書文化

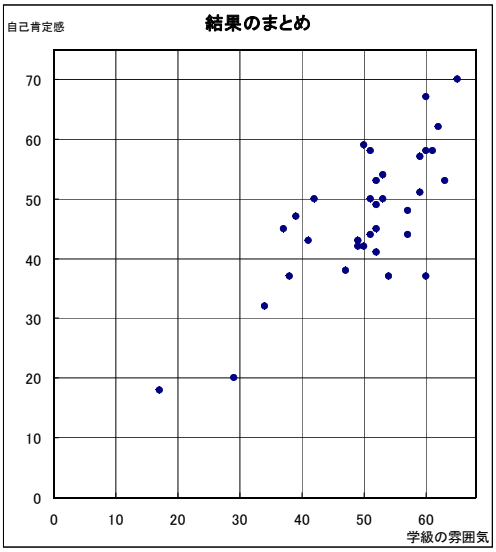
Ⅲ－実践３

１　実態

本学級は、中学校第１学年の学級である。学級の様子を観察してみると、素直な生徒が多く、学級の雰囲気も明るい。また、給食当番や清掃活動にも責任をもって取り組み、作業も早く協力的な生徒が多い。５月中旬に行われた学級対抗行事である３０人３１脚の対抗戦では、練習段階から協力して取り組むことができた。

表６は、５月末に行った自己肯定感と学級の雰囲気の認知に着目した質問紙（以下、Ｃ＆Ｓ質問紙と記す）の結果である。プロットされている位置からある程度まとまりのある学級であることが分かる。日常生活や行事の参与観察からも、統一感があり、全体指導がしやすい学級と言える。

表６　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果（５月）



しかし、生徒一人一人に目を向けてみると、学級の生徒それぞれが、様々な課題を抱えながら思春期の時期を生きている。生徒Ａは、理想の自分と現実の自分の差を感じ心に不安を抱いている。生徒Ｂは、休み時間には、学級集団から距離をおいている。休み時間等は、一人で読書をしていることが多い。生徒Ｃは、生徒Ａを助けている一方で、他の生徒とはうまくかかわりをもつことができないでいる。生徒Ｄは、日常の観察からは友達とうまくかかわっているように思えたが、Ｃ＆Ｓ質問紙の結果では、学級のまとまりから大きく離れたプロットを示していた。生徒Ｄは言いたいことが言えずに、みんなに合わせ明るく振る舞っている。

２　実践研究の考え方

（1）ねらい

本研究は、Ｃ＆Ｓ質問紙の結果から、気になる生徒に対して、学級とつながりを築く個別支援を行う。また、学級全体に対して、構成的グループ・エンカウンター（以下、ＳＧＥと記す）を中心とするグループアプローチを行うことによって、互いのよさを認め合い、集団として高め合っていく学級づくりをねらいとする。

（2）指導方針

本研究では、心に不安を抱える生徒Ａ、学級のまとまりから離れたプロットを示す生徒Ｂ、生徒Ｃ、生徒Ｄを抽出生徒とした。抽出生徒に対しては、本人への個別の支援や、学級とつなぐ支援を行う。そして、個別支援を展開しながら、学級に対しても、集団として育成する指導が必要であることから、①抽出生徒と担任（職員）が関係を築く支援（個別支援）、②抽出生徒が学級とのつながりを築く支援（個と集団をつなぐ支援）、③学級全体の凝集性を高める指導（一斉指導）に整理して支援することとする。

３　研究計画及び検証計画

（1）研究計画

以下の通り、個別支援並びに全体指導の計画を表７・表８にまとめる。

表７　個別支援の計画

抽出生徒	①抽出生徒と担任（職員）が関係を築く支援（個別支援）	②抽出生徒が学級とのつながりを築く支援（個と集団をつなぐ支援）
	母親の不安定感もあり、担任一人の対	仲のよい友達とのかかわり（学校でのかかわ

生徒A	応では限界がある。そのため、ケース会議（６月、９月）を開き、対応を共通理解し、チームで支援する。	り、放課後や休日でのかかわり）を深める。学級へ生徒Ａの状態を開示し、学級生徒の援助を求める。
生徒B	チャンス相談を活用して、気持ちを聞く。友達のかかわり方を伝える。	絵を描くことが好きであることから、体育大会の学級旗制作のメンバーにする。
生徒C	チャンス相談を活用して、担任が感謝の気持ちや頼りにしていることを伝える。	生徒Ａへの支援を進んで行ってくれていることを学級へ伝える。体育大会の学級旗制作のメンバーにする。
生徒D	生活ノートでのやりとりやチャンス相談を活用して、担任とのかかわりを増やす。	「いいところ探し」での学級からのコメントを学級通信に載せたり、担任が発表することによって存在感を持たせる。

表８　全体指導の計画

③　学級全体の凝集性を高める指導（一斉指導）		
月	主な行事・場面	内　　容
5	最初の席替え	「質問ジャンケン」 ２人組でジャンケン。勝った人は負けた人に質問をする。一定時間繰り返す。
7	１学期の 振り返り	「いいところ探し」（日常生活） 友達のよかったところ、頑張っていることを紹介し合う。
9	高原学校	「いいところ探し」（高原学校）
9	学級活動	「自分探し（エゴグラム）」 エゴグラムチェックリストで自己理解を深める。
10	体育大会	「いいところ探し」（体育大会）
11	学級活動	「合唱コンクールへ向けて」 合唱コンクールへ向けて頑張たいことや意気込みを発表し掲示する。
11	合唱ｺﾝｸｰﾙ	「いいところ探し」（合唱コンクール）

(2) 検証計画

①　検証仮説

Ｃ＆Ｓ質問紙を活用して把握した気になる生徒への個別支援や、学級全体へのグループアプローチを工夫することは、互いのよさを認め合い高め合える学級になるであろう。

②　検証の観点

気になる生徒への個別支援や、学級全体へのグループアプローチは、互いのよさを認め合い、高め合える学級にするために有効であったか。

③　検証計画

・　Ｃ＆Ｓ質問紙を活用して、客観的な実態把握や変容の様子を確認する（11月）。

・　抽出生徒については、チャンス相談や振り返りカードから、学級や自分自身に対しての気持ちを把握する（11月）。

４　研究の展開

(1) 関係を築く時期（個別支援）と他の生徒を知る時期（一斉指導）［５月～６月］

生徒Ａの心の状態が不安定になってから母親も不安定になっている。そのためケース会議では、生徒Ａ本人への支援と母親の支援をすることを決め、チームとしてかかわっていくこととした。７月には、心を開き話せる教師ができ、少しずつ登校を開始することができた。その後、給食を食べたりできるようになった。担任は母親との連絡を細かく行った。

生徒Ｂと生徒Ｃは、部活動が最も楽しい場になっていた。そのため、担任は週２回程度、部活動の時間に訪問し、雑談ではあったが話をする時間をもつことができた。担任が訪問すると、普段学級では見られないほどたくさんの話を楽しそうに自ら話すようになった。

生徒Ｄは、いつもにこにことした表情で友達と接しており、ほとんど自分の意見を話すことをしない。担任との１学期のチャンス相談の場面でも緊張し、自分自身を語ることがなかった。そこで、毎日提出している生活ノートを活用し、生徒Ｄの人柄が学級によい影響を与えていることや、頑張ったことに対して賞賛するコメントを多く返すようにした。

新学期間もない学級の堅さをとるため、次のエクササイズを選定して行った。

◇活動「質問ジャンケン」（２～３人組）SGE
ねらい　ゲーム感覚で質問を行うことで、友達の肯定的に認め合える雰囲気をつくる。
内容　・ルールを確認する。
（ジャンケンの前に「お願いします」を言い、頭を下げる。しっかり答える。）
・２人組になりジャンケンをして勝った方が負けた方に質問する。
・１回目は簡単な同じ質問を多くの人と行う。
様子　入学後１ヶ月半ということもあり、「犬と猫のどちらが好きか」という簡単な質問にして、より多くの生徒と交流するように設定した。生徒はもっと様々な質問をしたい様子であった。

(2) つながりを築く時期（個と集団をつなぐ支援）と他者を認める時期（一斉指導）［７月～11月］

生徒Ａは、２学期に入り欠席も大きく減少した。それまで、生徒Ａの様子を他の生徒に知らせ、学級の援助を求めたところ、生徒Ｃ以外にも進んで生徒Ａを助けようとする生徒が現れた。生徒Ａにノートを貸したり、生徒Ａの家まで行き、一緒に学習したりする生徒もいた。そのような友達の姿勢に、生徒Ａは体育大会に参加することができ、その日の帰りの会にも参加し、一緒に集合写真を撮ることができた。

生徒Ｂは、好きな美術の才能や技術を生かし、体育大会の学級旗制作にかかわった。一緒に制作にかかわった生徒から、頼りにされるようになり、その中で自分の価値を見出していった。しかし、まだまだ言葉がきつい面が見られたため、チャンス相談の場面で、言葉のかけ方などを話したところ、それを改め、いっそう他の生徒からの信頼を得た。

生徒Ｃは、体育大会の学級旗制作のリーダーとなった。自分の持っている技術を生かし、積極的に制作にかかわった。チャンス相談においては、そのことを褒めたり、感謝していることを伝えた。生徒Ｃ自身もうれしそうに学級旗のことを話していた。また、生徒Ａへのかかわりも頼りにしていることを伝えたところ、生徒Ａへの援助も、平日休日問わず惜しみなく行い、生徒Ａが体育大会に参加できる原動力になった。

生徒Ｄは自分のことを自ら表現しないため、高原学校のカッター実習や清掃に取り組んでいる様子を他の生徒と一緒に紹介しながら、学級へ伝えるようにした。その結果、休み時間等に生徒Ｄから他の生徒にかかわるような場面が見られるようになった。

お互いのよさを認め合うことで、温かな人間関係を築くために、以下のエクササイズを選定して実践を行った。

◇活動「いいところ探し」SGE
①ねらい　友達のよいところ、頑張っていたところを認め合うことで、温かな人間関係を築く。
②内容　・友達の日常での姿を振り返り、その子のよいところを書く。何人でも書いてよい。
・カードに書かれたことを読み上げ、感想を出し合う。
③様子　初めてのいいところ探しで、最初は緊張感があったが、初めの２、３人の発表を聞くたくさんのよいところが発表できた。１枚ももらえない生徒を避けるためにグループ内は全員、その後学級のどの生徒でもよいことにして発表させた。書かれたものは、その後、学級掲示した。

(3) 学級集団の凝集性を高める時期（一斉指導）［２学期、行事を通して］

中学校の特性として、学校行事は欠かせないものである。学級全員が同じ目的のもとで団結して行うことは、生徒の学級での存在感や学級の一体感をもたせるために有効である。この共通体験を成功させるために、それぞれの行事の前にＳＧＥや学級活動を行った。

行事に対して共通した目的や意識をもたせるために、以下のエクササイズを選定して実践を行った。

◇活動「合唱コンクールへ向けて」
①ねらい　合唱コンクールへ向けて意識をもち、取り組む目標を発表し認め合うことによって、目標へ向けて学級全員が一緒に取り組む雰囲気を高める。
②内容　・合唱コンクールの練習段階の半ばで行い、意欲や取組を発表し友達の頑張っている点も発表する。
・カードに書かれたことを読み上げ、感想を出し合う。
③様子　全国合唱コンクール金賞受賞校の取組の様子のＤＶＤを鑑賞したことや、自分たちのそれまでの取組を反省し、頑張っている友達を紹介したことがさらに学級の一体感を深めた。その後、合唱コンクールでも金賞を獲得し一段と学級の雰囲気はよくなった。

５　研究の結果と考察

(1) 研究の結果

表９は、Ｃ＆Ｓ質問紙の事後調査の結果である。事前事後の比較から、学級の雰囲気に対する満足度は平均4.1ポイント上昇した。一つ一つの行事に対して、練習を通してまとまりをつことができた。行事後の振り返りも、互いをたたえ、褒めたり認めたりするコメントを書くことができる生徒が増えてきた。

抽出生徒４名の変容（表10）は以下のとおりである。生徒Ａは、ほぼ毎日登校することができている。友達とのかかわりも増えた。生徒Ｂは、学級旗制作を通して、学級内の存在感を増した。「みんなで一緒に取り組んだ結果、行事で優勝を獲得できたことがうれしい。」と三者面談で話していた。生徒Ｃは、生徒Ａへも積極的に援助を行うなど、自分自身の存在価値を見出しているようであったがＣ＆Ｓ質問紙の結果をみると、やや向上するにとどまった。生徒Ｄは、いいところ探しや学級通信などで、他者から褒められたり認められたりする場面を多くもつことができた結果、Ｃ＆Ｓ質問紙の結果は大きく向上した。

表９　Ｃ＆Ｓ質問紙の結果（11月）

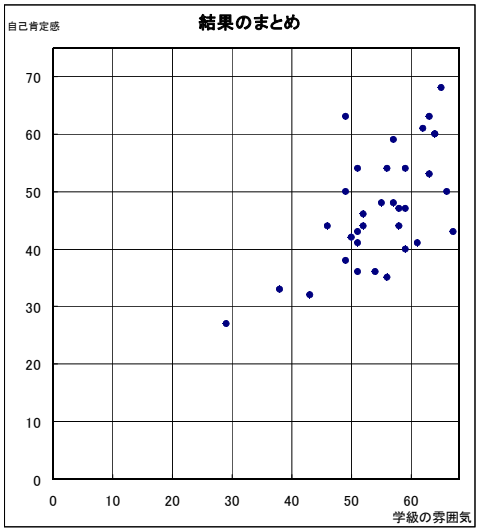


表10　抽出生徒の変化

抽出生徒	学級の雰囲気に対する満足度	自己肯定感
生徒Ａ	＋７	＋６
生徒Ｂ	＋１４	＋１２
生徒Ｃ	＋４	＋１
生徒Ｄ	＋１２	＋９

(2) 考察

褒め合い、認め合う活動を取り入れたことによって、学級の雰囲気が向上した。このままＳＧＥを継続していけば、さらによい雰囲気が広がっていくはずである。その結果は、担任の主観的判断だけでなく、Ｃ＆Ｓ質問紙も示す客観的データも示している。また、チャンス相談や生活ノートでのやりとりなど個別支援を行ったことによって、抽出生徒にもプラスの変化が生まれている。一方で、学級全体の自己肯定感にあまり変化が見られなかった。このことは、ＳＧＥの実施に当たり、他者理解をねらいとするエクササイズの選定したために、参与観察からは、他の生徒と協力しながらうまくかかわっているように感じられたが、自身の有用感をもつことができてない生徒がいると思われる。

また、他の生徒と上手にかかわりながら生活することができ一斉指導に自ら参加できる生徒と、観察やＣ＆Ｓ質問紙から個別支援を必要とされる生徒の中間層に位置する生徒の存在を、強く感じている。あまり目立った問題を抱えてはいないが、この生徒たちの支援にも、担任が抱える指導の困難さがあり、学級の雰囲気にも影響を及ぼす可能性があり、今後の課題として残る。これらのことを今後の学級つくりに生かしていきたい。

Ⅳ　成果と課題

本研究に当たり、３つの学級において実践が行われたが、Ｃ＆Ｓ質問紙の事前・事後の比較から、いずれの学級においても児童生徒の学級へ対する満足感や自己肯定感の向上がみられた。「総合的理解」により、実態に適した「個別支援」と、その学級オリジナルの手だてである「グループアプローチ」は、学級づくりに有効であるという可能性を示唆できた。

１　学級づくりは総合的理解から

これまで、児童生徒の実態を把握する方法として、担任教師の主観的判断に頼ることが多かった。そこで、主観的判断に加え客観的データを用いることによってより正確な実態把握となり、それが総合的理解へとつながった。実践を行った結果、学級の満足度や自己肯定感が向上した結果をみると、児童生徒理解の基本は、参与観察や面接による主観的判断と、諸検査等による客観的判断を合わせた総合的理解が必要であると考えられる。

２　一人一人の個別支援の必要度をつかむ

総合的理解により、気になる児童生徒が抱えている課題を把握することができた。その生徒の課題に即した個別支援を行うことは、集団全体を機能させるためにも必要であった。そのために、具体的支援として、チャンス相談や生活ノートでのやり取りを行った。そして、特別支援教育を含めて個別支援の必要度によっては、担任だけでは抱えきれない場合があり、チーム支援が必要である。

３　心がふれあう集団体験

集団体験を活用した開発的な対応として、総合的理解から実態に合ったＳＧＥやＳＳＴなどの集団体験を用いたことは有効であった。これらは、学級の雰囲気をよい方向へ高め、自己肯定感を向上させた。実態に合った集団体験を実践に生かす方法は、居心地のよい学級へと変容していくための一つの方法を示していると考えられる。

４　個が集団を、集団が個を育てるグループアプローチ

これまで、気になる児童生徒にも配慮しながら学級経営を行ってきたが、個別支援と集団育成のバランスや、それらを同時に行うことへの具体的な手だての在り方を考えないことが多かった。しかし、学級全員の児童生徒にとってどちらかだけの指導支援でよいというものではない。一人一人の児童生徒は学級とのつながりの中で生活しており、その学級集団も児童生徒一人一人から成り立っているのである。そのため、個人として向上するためにも学級集団として向上するためにも、図５に示すように個別支援と集団育成を統合する支援として、双方に作用するグループアプローチが学級全員にとって必要であり、個と集団をつなぐ指導の工夫が必要である。

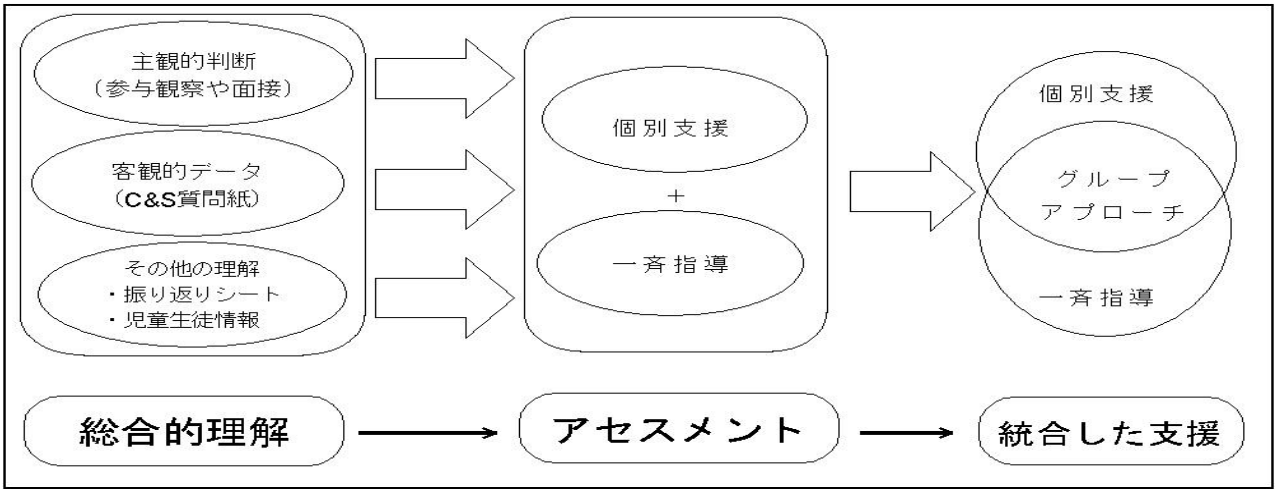


図５　個別支援と集団育成を統合した支援の構図